

小学校外国語活動の指導と評価に関する研究

～円滑な小・中接続を考える～

小学校外国語活動研究チーム

【要旨】平成23年度から完全実施となる小学校における外国語活動について、昨年度の研究の成果と課題に基づき、外国語活動の指導と評価の在り方及び円滑な小・中接続に関する研究を行った。評価に関しては、指導者が客観的な根拠に基づいた総括的評価及び形成的評価を行うための手立てを示した。円滑な小・中接続に関しては、外国語活動用補助教材の作成及び外国語活動での経験を生かした中学校での授業展開例を提示した。

【キーワード】

客観的な根拠 総括的評価 形成的評価 文字導入 授業改善 円滑な小・中接続

チームメンバー

和歌山県教育センター学びの丘研修員

田辺市立中辺路中学校

教 諭 手嶋 由美子

白浜町立富田小学校

教 諭 神田 将孝

和歌山県教育センター学びの丘

研究開発課長 三角 雅彦

研究開発課

指導主事 喜多 恭子 ○

基本研修課

指導主事 赤井 祥子

指導主事 辻岡 直樹

専門研修課

指導主事 辻内 高政

○印…チーフ

研究協力者

京都外国語大学

特任教授 齋藤 榮二

京都外国語大学

教 授 石川 保茂

帝塚山学院大学

専任講師 近藤 睦美

西牟婁教育支援事務所長

向井 忠晴

田辺市教育委員会

指導主事 林 義久

指導主事 玉井 朋子

外国語指導助手 Cynthia Alice White

白浜町教育委員会

指導主事 小川 雄三

白浜町立富田小学校

教 諭 豊田 晋子

教 諭 前田 達郎

【目次】

1 研究の背景	3
（1）社会のグローバル化と外国語教育	
（2）外国語活動の基本的な考え方	
（3）平成 22 年度の研究課題	
2 客観的な根拠に基づく外国語活動における評価	5
（1）外国語活動における評価の経緯と課題	
（2）取組のねらいと基本的な考え方	
（3）指導者による評価	
ア 場面を設定した評価	
イ 授業全体を通じた評価	
（4）児童による評価	
ア 自己評価	
イ 相互評価	
（5）外国語活動における評価のまとめ	
3 小学校（外国語活動）と中学校（外国語科）との円滑な接続	12
（1）現状と課題	
ア 中学校外国語科に対する不安や負担の軽減	
イ コミュニケーションをより重視した授業	
ウ 小・中教員の連携	
エ 中学校での英語授業の工夫・改善	
（2）取組の基本的な考え方	
（3）外国語活動用補助教材「どんな音かな？クイズ」の作成	
ア 教材の概要	
イ 結果	
ウ 考察	
（4）小学校外国語活動での経験を生かした中学校での授業展開例の提示	
ア チャンツ	
イ 共通の言語の使用場面	
ウ 自己表現活動	
エ ペア・グループ活動	
（5）小・中接続のまとめ	
4 今後に向けて	21

1 研究の背景

(1) 社会のグローバル化と外国語教育

社会のグローバル化と情報化が急速に進展する中、日本は、安全保障、経済問題、エネルギー問題、食糧問題等の諸問題の解決のために、他国と折衝し、よりよい解決策を模索する力がますます求められるようになってきた。また、個人の生活においても、外国人とふれあう機会が増えたり、インターネットを通じて即座に世界とつながったりすることができるようになった。

このような状況の中で、自分の意見を発信したり自国を紹介したりする力や、異文化を理解する力が必要になり、より一層コミュニケーション能力育成を目指した外国語教育の充実が求められるようになってきている。小学校における外国語教育の導入については、1980年代の中頃から論じられてきたが、「外国語教育より国語教育に力を入れるべき」「英語が唯一の国際言語ではない」等の反対意見があり実現には至らなかった。しかし、平成18年3月末に中央教育審議会外国語専門部会において、小学校高学年における外国語活動の共通の教育内容に対する検討が始まり、平成20年3月に告示された小学校の新学習指導要領において、領域としての「外国語活動」の必修化が示された。(平成21、22年度は移行期間、平成23年度全面実施)

(2) 外国語活動の基本的な考え方

『小学校学習指導要領』(文部科学省2008)には、外国語活動の目標について次のように記されている。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

外国語活動の授業において、児童は一方的に知識を注入されるのではなく、様々なコミュニケーション活動をとおして、「言語や文化への理解」「コミュニケーションへの積極性」「音声や表現に慣れる」の3つの目標を達成しながらコミュニケーション能力の素地を養うこととされている。

「外国語」とされているが、実際の運用については原則的には英語を扱うこと、第5学年、第6学年において、それぞれ年間35時間の授業を行うこと、また、指導はALTや英語が堪能な地域人材とのティーム・ティーチング(以下、T・T)を基本として、学級担任が行うこととされている。また教材については、共通教材の『英語ノート1、2』とデジタル版が配付されている。

(3) 平成22年度の研究課題

和歌山県教育センター学びの丘では、平成20、21年度の2年間にわたって小学校外国語活動に関する研究を行ってきた(詳細については『平成21年度和歌山県教育センター学びの丘研究紀要』または同センターwebページhttp://www.wakayama-edc.big-u.jp/kenkyukiyo21/kenkyukiyo_top.htm 参照)。この2か年の研究では「オリジナル ICT 教材の開発」とそれを用いた授業モデルを提示することで、指導にあたる学級担任の不安や負担を軽減する効果を検証することができた(次頁図1)。

これまでの研究成果に基づき、今年度は、昨年度作成した ICT 補助教材(『英語ノート1』レッスン4～6に対応)に加えて、その他のレッスンに対応した教材の作成に取り組んだ。今年度新たに工夫した点は、昨年度、各授業の終わりの挨拶として設定していた「グッバイジャンケン」に替えて、異文化を知ることがを目的として、英語の音声や写真をヒントにどこの国かを考える教材「国あてクイズ」を組み込んだことである。

また、平成21年度の研究においては、児童の自己評価、相互評価について一定の成果を確かめることができたが、指導者の評価については引き続き研究すべき課題が残った。これは、授業時間内にすべての児童をみとることの物理的な難しさ、慣れ親し

みや、関心・意欲・態度をどう評価するかという難しさなどをいかに改善していくかということであった。今年度はそれらの課題の解決を図りつつ、授業の中で指導者が行う評価の具体的な評価規準・評価基準、方法、場面などを研究することとした。

さらに、平成 22 年 4 月には、新課程に基づいた外国語活動を経験した生徒が中学校に入学している。外国語活動での経験を中学校での英語の授業に生かし、小学校外国語活動と中学校外国語科を円滑に接続すること（以下、小・中接続）は、早急に取り組むべき課題である。これまでも、小・中接続については、外国語活動における文字導入という形で取り組んできたが、今年度は、中学校での授業を視野に入れた小学校での ICT 補助教材を作成することと、小学校での経験を考慮した中学校外国語科授業の展開例を提示することを通して、円滑な小・中接続の在り方を研究することとした。

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
小学校外国語活動をめぐる状況	・小学校学習指導要領告示（外国語活動導入決定）（平成 20 年 3 月 28 日） ・英語ノート試作版を拠点校に配付 ・外国語活動中核教員研修実施	・英語ノート及びデジタル版配付 ・外国語活動中核教員研修実施	・英語ノート配付
当センター実施のアンケート調査により得られた外国語活動に関するニーズ及び課題	①学習目標の提示 ②目標達成のための指導案提示 ③教具の種類及び指導方法の提示 ④教員に求められる英語力の提示 ⑤評価の規準と方法の提示	①教材開発や準備のための時間の確保 ②児童がより楽しく学べる教材の提示 ③英語指導に関する知識やスキルの提示 ④ALT 来校回数の増加 ⑤電子黒板等の機器の充実	①具体的な評価規準・評価基準、方法、場面などの提示 ②中学校との円滑な接続
研究内容	オリジナル ICT 教材の開発 ・『英語ノート』に準拠した電子黒板用デジタル教材の設計と開発 ・電子ペンマンシップ活動 ・オリジナル ICT 教材及び関連する教具を効果的に利用した授業モデル構築 ・オリジナル ICT 教材を利用した指導及び学習上の効果の検証 ・外国語活動実施に関する学級担任及び児童の意識調査		
		オリジナル ICT 教材の開発 ・ ICT 教材「実写版 ALT 動画」の開発 ・「聞く」「話す」活動の充実 ・文字の効果的な導入	・過去 2 年間の研究をベースに ICT 教材を充実、異文化理解の教材「国あてクイズ」を追加
		評価について ・評価の方法について	・評価の具体的な評価規準・評価基準、方法、場面などの提示 小・中接続 ・円滑な小・中接続を目指した外国語活動用教材作成と中学校での授業展開例提示
研究成果	オリジナル ICT 教材の開発についての成果 ・ ICT 機器活用によってテンポのよい授業展開を実現した。 ・ ALT との T・T に近い環境を創出することができた。 →学級担任は「学習者のモデル」の姿勢を示すことができた。 →学級担任の英語使用に係る負担を軽減した。		
		評価についての成果 ・自己評価、相互評価について →学習・コミュニケーションへの意欲が向上した。 ・指導者による評価 →児童の実態把握・授業改善に生かすことができた。	・客観的な評価のための具体的な評価規準・評価基準、方法、場面の例を示すことができた。 小・中接続の成果 ・円滑な小・中接続を目指した小学校外国語活動用教材を作成し、中学校での授業展開例を提示することができた。
		指導者による評価の具体的な評価規準・評価基準、方法、場面は示すことができなかった。	

図 1 3 年間の研究の流れ

2 客観的な根拠に基づく外国語活動における評価

(1) 外国語活動における評価の経緯と課題

評価の在り方については、平成 20 年 1 月に出された中央教育審議会答申において、「小学校における外国語活動の目標や内容を踏まえれば、(中略)教科のような数値による評価はなじまないものと考えられる(※1)」と述べられている。また、平成 20 年 8 月に出された『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』(文部科学省 2008)では、目標及び内容は示されたが、具体的な評価の観点までは示されなかったため、指導者は『英語ノート指導資料』の評価規準例を参考に評価を行ってきた。平成 22 年 5 月には、文部科学省から「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に関する気付き」という 3 つの評価の観点例が示され、これらの観点や学校の設置者が定める観点に沿って、記述によって評価を行うこととされた。

しかし、外国語活動においては、他の教科のように具体的な評価規準・評価基準、方法、評価を踏まえた授業改善、個に応じた指導などの実践が十分ではない状況である。加えて、目標に準拠した観点に沿った記述評価を行うには、客観的な根拠が必要であることから、外国語活動においても、具体的な評価規準・評価基準、方法、場面などを明確にしていくことが課題である。

(2) 取組のねらいと基本的な考え方

外国語活動における評価を適切かつ客観的に行うためには、児童の学習状況を的確に把握し記録する必要がある。そのためには、複数の評価手法^(注1)を用いて総合的に児童の姿をみとることが重要であると考え。それは、1 つの評価手法だけでは、児童の様々な技能や態度を適切に記録することは困難であると同時に、得られたデータの信頼性が低くなってしまう可能性があるからである。複数の評価手法が総合的に利用されることの必要性は松川他(2008)によっても述べられている。本研究においては、評価者を指導者と児童の 2 者とした上で、複数の評価手法を以下のようにとらえ、取組を進めることとした。

まず、指導者による評価について述べる。指導者による評価については、「行動・発言」だけではなく、「技能」「表現」もみとることとした。ただし、本研究での「技能」「聞くこと」「話すこと」の評価は、中学校外国語科で行われている発音や文法の正確さをみとめるのではなく、各単元の最終時で行う活動に必要な語彙や表現を身に付けるための支援を行うことを目的とする。また「表現」の評価は、ワークシートなどへ記述された児童の「言語や文化に関する気付き」をみとることとする。このようにすることで、客観的な評価が可能となり、児童の学習状況を的確に把握することにつながる。と考える。

また、評価を行う場面については「場面を設定した評価」と「授業全体を通した評価」で行うこととした。「場面を設定した評価」では、各時に 1 つの観点に沿った評価規準・評価基準、場面を設定し、児童の学習状況を数値化し評価シートに記録することとした。「授業全体を通した評価」では、設定した評価場面ではみとることができない児童の関心・意欲・態度面について評価シートに記録することとした(表 1)。

表 1 指導者による評価一覧

評価の場面	評価の観点	評価対象	評価方法	評価シート
場面を設定した評価	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	※本研究においては、授業全体を通した評価のみで実施した。		
	外国語への慣れ親しみ	技能	「聞くこと」「話すこと」を点数化	「外国語への慣れ親しみ」の評価シート
	言語や文化に関する気付き	表現	ワークシートへの記述を数量的に把握	「言語や文化に関する気付き」の評価シート
授業全体を通した評価	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	行動・発言	行動観察・発表観察	行動・発言観察シート
	外国語への慣れ親しみ			
	言語や文化に関する気付き			

(注 1) 本研究における複数の評価手法とは、「評価者」「評価場面」「評価対象」「評価方法」を指す。

次に、児童による評価について述べる。児童による評価については、自己評価と相互評価の2つで行うこととした。『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』（文部科学省 2010）においては、自己評価と相互評価について、「児童生徒の学習活動であり、（中略）主体的に学ぶ意欲を高めるなど、学習の在り方を改善することに役立つ（※2）」と示されている。このように、自己評価、相互評価を学習活動の一環ととらえながら、より総合的に評価を行うため、指導者による評価の補助資料としても用いることとした。

以上の複数の評価手法によって得られた児童の学習状況の記録は、単元終了時や学期及び学年終了時に記述する総括的評価と、児童の学習の達成状況を把握し、支援や授業改善に生かすための形成的評価の客観的な根拠として活用することができる（図2）。

以下に、客観的な根拠に基づく評価を行うための複数の評価手法について「指導者による評価」と「児童による評価」に分け、具体的に述べる。

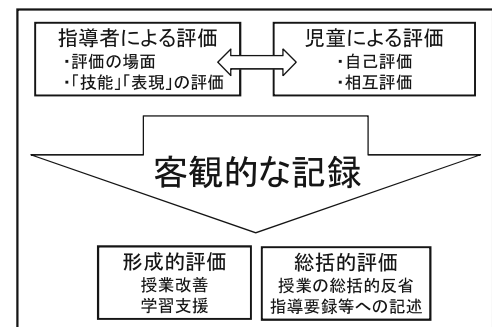


図2 研究の概念図

（3）指導者による評価

ア 場面を設定した評価

場面を設定した評価は「外国語への慣れ親しみ」と「言語や文化に関する気付き」の観点において行うこととする。各時の授業ではこれら2観点のうちの1つについて評価規準・評価基準、場面を設定する。授業展開の中で、設定した場面における児童の学習状況を評価シートに記録することとした。

「外国語への慣れ親しみ」の観点では、評価基準に基づいて、活動に必要な表現を聞いて理解できたかどうかや、口に出せたかどうかを点数化（3点、2点、1点）して記録する。また「言語や文化に関する気付き」の観点では、児童のワークシートへの記述を数量的にとらえて記録する。このように記録することで、得られたデータに客観性を持たせると同時に、作業を効率化、簡素化できると考える。

（ア）評価の観点「外国語への慣れ親しみ」

金森（2010）は、「中学校の『外国語科』につながる」として、小学校の『外国語活動』を通して育まれる具体的な児童の姿が明らかにされなければならないはずである。（中略）つまり、『方向目標』だけではなく、ある程度の『到達/行動目標』としての評価規準が示されなければならないはずである。（※3）」と述べている。また、樋口（2009）は、知識・技能（スキル）を教え込むのではないとしながらも、留意点として「知識やスキルの習得と英語学習やコミュニケーションに対する態度を養う」といった情意面は密接にかかわっているという側面を忘れないようにしたい。（※4）」と述べている。

児童が外国語活動に自信を持って意欲的に取り組めるようになるには、単元の学習活動に必要な表現を話したり聞いたりできることが重要と考える。そのための支援を行うには児童の学習状況を正確に把握する必要がある。そこで、本研究においては「外国語への慣れ親しみ」を評価する資料の1つとして「聞くこと」「話すこと」の技能について「できたか」「できていないか」を記録することとした。評価基準に基づいて「できたか」「できていないか」を判断することは比較的容易であり、それによって得られた記録には客観性があると考えからである。ただし、『英語ノート指導資料』に記載されているように、表現の定着やいわゆるスキルのみの評価にならないように注意すべきである。次頁に、学習指導案（図3）及び評価シート（図4）を示す。

Lesson 7-2 本時の目標 What's this? という質問を理解し、答える。 扱う表現「What's this?」「It's a book.」など 展開				
★は電子黒板上の動作ボタンをタッチすることを意味する。				
過程	児童の活動	HRTの活動 ●指導の留意点 ◎評価の観点 □支援	実写版 ALT と HRT の指示・発問	電子黒板画面 教材・教具
挨拶	・英語であいさつをする	・英語で全体にあいさつ	・今日がんばるところ	・スケジュール表
読み聞かせ	【読み聞かせ】 【シャドーイング】 シャドーイングをする		"Listen." "聞いてみましょう。" Let's try shadowing.	・電子黒板 ・オリジナル読み聞かせ教材
復習 5分	【Let's Chant】 ・チャンツをする。	★「レッツチャンツ」をさせる。	"Let's Chant"	・英語ノート
	・めあてを確認する。	・めあてを示す。 英語を使って、クイズを出したり答えたりする言い方を知ろう。		・めあてカード
展開 20分	【Activity2】 ・ALT動画をみて、活動内容を理解する。	★ブラック・ボックス・クイズ ●扱う表現を練習させる。 ・What's this? ・It's a ~. ◎It's a ~.と答えている。 (行動観察) □It's a ~.の発音練習をする。	・どんな活動をしているか考えながら見よう。 ・What's this? ・It's a ~.	・絵カード
	・ブラック・ボックス・クイズをする。 (質問する児童) ・前に出ている児童にWhat's this?と言う。 前の児童は予想して答える。 (答える児童) ・ブラックボックスの中に手を入れて、中に何が入っているかを予想して答える。 It's a ~.	(個別指導) ・ブラック・ボックス・クイズをすることを告げる。 ●児童が持って来たもので、クイズをする。(授業までに持って来たものを英語で答えられるように調べておく。)	・ブラック・ボックス・クイズをしよう。 Look at this box. What's in the black box? You can touch something in the box. Who wants to try?	・ブラックボックス
挨拶 5分	・ふりかえりカードを書き、本時の授業を振り返る。 ・次時予告を聞く。 ・グッバイジャンケン、挨拶をする。	・本時の授業を振り返る。 ●クラスや児童について良かった点やがんばっていた点をほめる。 ・次時予告 ★「グッバイジャンケン」ジャンケン、挨拶をさせる。		

評価の手順

外国語に対する慣れ親しみ(技能)

①絵カードを用い、扱う表現を練習する。
(教師⇄全体)
↓
②絵カードを用い、扱う表現についての定着をみる。(教師⇄児童1人ひとり)【評価】
↓
③できたことをほめる
つまづきがあるときは支援をする。
↓
④A, Cのみメモをとり、授業後評価シートに転記する。

図3 L7-2の学習指導案(「外国語への慣れ親しみ」の評価場面と手順)

観点2 外国語への慣れ親しみ						
番号 氏名	L7-2 規準		L7-3 規準		合計	
	・What's this?と質問できたり、It's a ~と答えたりしている。(絵カードを使った行動観察)		・教室内で相手を見つけ、互いにクイズを出しあう場面において、 "What's this?" "It's a ~"と英語を使って会話をしている。(1対1の様子)行動観察		5点から6点 A 3点から4点 B 2点……… C	
	・What's this? It's a ~ 両方でできている。(3点)	・What's this? It's a ~ 片方だけできている。(2点)	・What's this? It's a ~ 両方でできている。(3点)			
	・What's this? It's a ~ 片方だけできている。(2点)	・What's this? It's a ~ 片方だけできている。(2点)				
	・What's this? It's a ~ 両方でできている。(1点)	・What's this? It's a ~ 片方だけできている。(1点)			合計点数	レッスンでの総合評価
1	3					
2	2					
3	3					
4	3					

留意点

外国語に対する慣れ親しみ(技能)

①評価の規準を設定する。

②具体的な評価基準(A, B, C)を設定する。

③できたか、できていないかで評価する。

④基準に従って、できたことを点数化して記録する。

図4 「外国語への慣れ親しみ」の評価シートと留意点

(イ) 評価の観点「言語や文化に関する気付き」

「言語や文化に関する気付き」の観点に沿った内容は、『英語ノート』の各単元において、第1時に扱われていることが多い。これは、「言語や文化に関する気付き」を豊かなものとするにより、学習意欲を高めることをねらいとしていると考える。本研究では、授業の中で児童が容易に気付きを得ることができるようにワークシートや教材を工夫し、児童の記述を数量的にとらえ記録することとした。次頁に、学習指導案(図5)、ワークシート(図6)及びその結果を記録する評価シート(図7)を示す。

Lesson7-1 本時の目標 英語と日本語との違いを通して、漢字の成り立ちの面白さに気付く。 扱う表現「What's this?」「It's a pencil.」など 展開				
★は電子黒板上の動作ボタンをタッチすることを意味する。				
過程	児童の活動	HRTの活動 ●指導の留意点 ◎評価の観点 □支援	実写版 ALT と HRT 指示・発問	電子黒板画面 教材・教具
挨拶	・英語であいさつをする	英語で全体にあいさつ。	Hello, how are you?	・お天気カード
読み聞かせ	【読み聞かせ】 【シャドーイング】 ・シャドーイングをする。	・絵を見せ、どんな物語か予 ●話の内容や聞き取れたことを児童に尋ね、確認する。 ★シャドーイング	“どんな言葉が聞き取れましたか。” “Let's try shadowing.”	・電子黒板 ・オリジナル読み聞かせ教材
	・めあてを確認する。	●本時のめあてを確認させる。 英語と日本語の言葉の成り立ちについて同じところや違うところに気付こう。		・めあてカード
展開	【Activity 1】 ・漢字を見て、それが水族館のどの生き物かを考え、読み方を推測する。 ・①～③の読み仮名を書く。 ・①～③の読み仮名を発表し、答え合わせをする。 ・④、⑤ができていない児童は発表する。 ・①～⑤で気付いたことをワークシートに書く。 ・数名が気付いたことを発表する。 【Let's chant】 ・チャンツをする。	①海星（ヒトデ）②海老（エビ）③海月（クラゲ） ④海胆（ウニ）（sea urchin）【海のわんぱく坊主】 ⑤海鼠（ナマコ）（sea cucumber）【海のキュウリ】 ★Activity1（海星、海老、海月、海胆、海鼠） 教材を見せながら答え合わせをする。 ●①～⑤の写真を見せ、写真と名前との関係などを気付かせる。 ●①～③言葉の成り立ちの共通点や相違点を発表させる。 ◎英語と日本語の成り立ちの同じところや違うところに気付いている。（ワークシート） ・机間指導をする。 □写真と日本語との共通点を書かせる。		・電子黒板 ・英語ノートデジタル版
まとめ	・ふりかえりカードを書き、本時との授業をふりかえる。 ・グッバイジャンケン、挨拶をする	★「レッツチャンツ」をさせる。 ・本時の授業を振り返る。 ・クラスや児童について良かった点やがんばっていた点をほめる。 次時予告 ★「グッバイジャンケン」		

評価の手順

言語や文化に関する気付き(表現)

①読み方のヒントとなる教材を提示(教師⇄全体)
↓
②読み方の答えを合わせる。(教師⇄全体)
↓
③本時の目標に沿った気付きを記述させる。(視聴覚教材やワークシートにヒントを十分に準備しておく。)
↓
④気付きを全く記述できない時は、写真との共通点を見つけさせるなどして支援する。
↓
⑤ワークシートの記述を数量的にとらえ、評価シートに記録する。
【評価】

図5 L7-1の学習指導案（「言語や文化に関する気付き」の評価場面と手順）

Lesson7-1				
本時の目標を示す				
Name()				
目標 英語と日本語との違いを通して、漢字の面白さに気付こう！				
漢字	(読みがな)	英語	気付いたこと	
1 海星	()	STAR FISH 星型の魚	英語と日本語の相違点や共通点に容易に気付けるように並べて提示	
2 海老	()	LOBSTER イセエビ		
3 海月	()	JELLYFISH ゼリーみたいな魚	気付いたことをたくさん書ける大きな枠	
4 海胆	()	SEA URCHIN 海のわんぱくぼうず		
5 海鼠	()	SEA CUCUMBER 海のきゅうり		
			児童が記述した気付きを評価シートに記録	

図6 L7-1「言語や文化に関する気付き」のワークシートと工夫点

観点3 言語や文化に関する気付き				
	L7-1 指導 漢字の読み方を考える活動を通して、漢字の成り立ちの面白さに気付いている。			留意点 言語や文化に関する気付き(表現) ①評価の規準を設定する。 ②具体的な評価基準(A, B, C)を設定する。 ③記述を評価する。 ④基準に従って、記述を数量的にとらえ記録する。
評価規準	気付いたことを2つ書いている。A			
	気付いたことを1つ書いている。B			
	何も書いていない。書かないことを書いている。C			
1	A			
2	A			

図7 「言語や文化に関する気付き」の評価シートと留意点

(ウ) 結果

この評価を行った指導者からの意見

- ・場面が設定されているので評価しやすかった。
- ・評価する具体的な評価基準が示されているのがよかった。
- ・児童の1時間ごとの学習状況を見つめることができた。
- ・(毎時間評価の場面を設定することは大変なので) 評価を行う場面を1つの単元に1か所にしてみてはどうか。

(エ) 考察

各時の授業の目標に沿った評価の場面を設定したことにより、児童の学習状況をより明確に把握することができた。また、評価基準を明確に示すことで記録することが容易になったと考える。1時間毎の学習状況の記録を得ることで、客観的な根拠に基づく総括的評価、形成的評価が可能であると考えられる。

評価シート作成においては、『英語ノート指導資料』に示された評価の基準に沿って基準を設定することが困難であった。より広く共通理解が得られるような基準を設定するために、さらなる検討が必要である。

イ 授業全体を通した評価

(ア) 評価の観点と方法

この評価では、3つの観点それぞれについて評価基準・評価基準を設定し、行動・発言観察シート（図8）を単元ごとに1枚作成した。シートには、授業全体を通した児童の反応で、特に優れていたもの及び課題と感じられたものを記録することとした。このような児童の行動や発言を記録する場合、指導資料等にも示された評価基準だけでは、児童がどのような姿であった時に「A」と記録するのかを判断することが困難である。そこで本研究では、具体的な評価基準を設定し児童の姿をみとることで客観的な評価につながる記録を得ることができると考えた。

行動・発言観察シート Lesson ()																
規 準			1. コミュニケーションへの関心・意欲・態度 ・外国語を用いてコミュニケーションを図ること(話したり聞いたりすること)に興味を持ち、取り組んでいる。				2. 外国語への慣れ親しみ ・異なる文化をもつ人々との交流などを進んで体験したり、外国語や異文化などに対する理解を示したり興味を示したりしている。				3. 言語や文化に関する気付き ・外国語の音やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く。 ・日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付く。					
評価基準		A	相手に間違いを恐れず話しかけたり聞いたりしている。				工夫しながら、積極的に話したり聞いたりしている。				学習内容で気付いたことを積極的に発言している。					
		C	相手に話しかけたり聞いたりしていない。				興味を示さず、積極的に話したり聞いたりしていない。				興味を示さず、学習内容で気付いたことを発言していない。					
番号	氏 名		時		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
1							A	A								A
2						A		A		A			A			
3							A				A				A	

図8 3つの観点に対する行動・発言観察シート

(イ) 結果

この評価を行った指導者からの意見

- ・どの観点について評価したものかが分かりやすい。
- ・観点を示したことで、どの観点で児童が頑張っているかをみとることができる。
- ・授業後に記録するため、記憶が曖昧になるという問題がある。

(ウ) 考察

児童は、指導者が設定した評価場面以外でも意欲的に学習に取り組んでいる。場面を設定した評価だけでは、そのような態度を記録することができない。この授業全体を通した評価では、3つの観点に沿った評価基準を設けることで、場面を設定した評価では反映されない児童の頑張りを客観的に記録に残すことができたと考える。

このように、場面を設定した評価だけでなく、授業全体を通した評価、また自己評価シート（ふりかえりカード）への記述内容などを基に、総合的に評価を行うことが望ましいと考える。

(4) 児童による評価

ア 自己評価

(ア) 場面と方法

授業の終わりに、ふりかえりカードを用いて行う。

(イ) 改善点

昨年度の研究においては、自己評価を行うことで、児童自身が今後の活動への意欲を高めたり、指導者が授業改善に役立てたりすることに一定の効果が見られた。それらを踏まえて本年度は、ふりかえりカードに以下3点の改善を行った。

1点目に、1枚のカードに1単元（4時間）のふりかえりを記入することとした（次頁図9）。1枚にまとめることで、児童は、前時の学習内容をふりかえりな

が記入することができ、指導者は、単元を通じた児童の変容を見ることができると考えた。

2点目に、児童のふりかえりの視点を3つの評価の観点と対応させた。対応させることにより、児童に外国語活動の目標を意識させる効果が期待できると考えた。

3点目に、児童に1時間の自分の活動をふりかえる際の視点を具体的に示した。自己評価は、厳しく評価したり、甘く評価したりして偏ったものになりやすい。そこで児童生徒が適切な評価を行うために、ふりかえりの視点を明確に示しておくことが必要であると考えた。特に「外国語への慣れ親しみ」の観点においては、児童が「聞くこと」「話すこと」についてのふりかえりを行うが、授業ごとに活動内容が違うため、カード上では

☆☆☆ふりかえりカード☆☆☆

Lesson () Name ()

★今日の自分はどうか、授業をふり返ってみよう。ABCのうち当てはまるものに○をつけよう。

とてもしている A まあしている B あまりしていない C

項目	進んで活動に取り組もうとしたよ。	気になったこと	気になったこと	気になったこと	先生から
月 日	A B C	A B C	A B C	A B C	
月 日	A B C	A B C	A B C	A B C	
月 日	A B C	A B C	A B C	A B C	
月 日	A B C	A B C	A B C	A B C	

がんばるポイント
・話されている内容を分かって聞こう。

がんばるポイント
・間違いをおそれずに言おう。
・相手に伝わるように言おう。

図9 ふりかえりカード

「話すこと」「聞くこと」の項目を記号（口マーク、耳マーク）で示し、授業の中で、ふりかえりの視点「がんばるポイント」として分かりやすく示すこととした。

(ウ) 結果

前時の記述を基にしていると考えられる児童の感想

- ・(前時) チャンツは前よりできた。
- ・(本時) チャンツは今までで一番できた。
- ・(前時) あまり答えられなかったので次はがんばって答えたい。
- ・(本時) 少しだけ大きな声で発表できたので次もがんばりたい。

ふりかえりの視点を意識して書かれたと考えられる感想

- ・「間違いをおそれずに言おう」がちょっとできんかった。
- ・(前時) (ふりかえりの視点についての評価が) 1つずつ上がったのでよかったです。
- ・(本時) 進んで活動に取り組もうとしたところが1つ下がったので、次は1つ上がるようにしたいです。

この評価についての指導者からの意見

- ・児童が自分の学習をしっかりとふりかえて書いていた。
- ・学習の喜びや達成感が文章に表れていた。
- ・授業中にみとりきれなかった部分を見ることができた。
- ・コメントを書く時間がなかなかとれず、児童へのフィードバックに時間がかかる。

(エ) 考察

上記の結果から、1単元4時間のふりかえりを1枚のカードに記入することにより、児童は前時をふりかえりながら本時の学習について記入することができていた。ふりかえりの視点をがんばるポイントとして示し、ふりかえりをさせることで、児童に自身の学

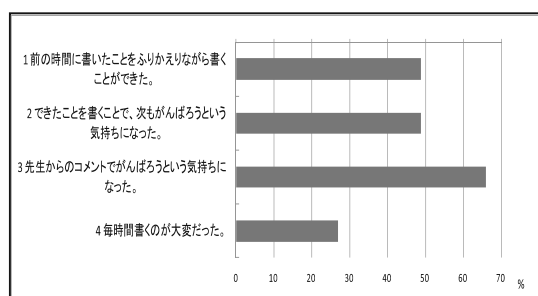


図10 児童の事後アンケート

習状況に気付かせ、上達感を実感させることができたのではないかと考える。また、指導者はふりかえりカードの記述内容から、次時の授業改善のヒントを得ることができた。前頁図 10 は授業を受けた第 5・6 学年の児童 41 名を対象に行った事後アンケート（4 つの項目から選択、複数回答可）の回答状況の一部を示したものである。ふりかえりカードへの記入について、66% の児童が「先生のコメントでがんばろうという気持ちになった」と回答した。一方、27% の児童は、「毎時間書くのが大変だった」と回答した。指導者からも、「コメントを書き、フィードバックをするのに時間がかかった」という意見を得たことから、児童や指導者にとっての負担を軽減するため、様式や記入の仕方などの工夫改善が必要であると考える。

イ 相互評価

（ア）場面と方法

『英語ノート 2』Lesson 7 第 4 時の発表活動時に相互評価シート「Road to Speech Master!」

（図 11）を用いた。

（イ）改善点

昨年度の研究では相互評価を行うことで、児童の関心・意欲の向上に一定の効果が見られた。

今年度の改善点としては、話されていることをしっかり聞いて理解しようとする態度を養うことを目的に、聞き取れたことをメモする欄「こんなことがわかったよ!」を設けた。

（ウ）結果

聞き取れたことをメモする欄には、聞いた内容を細かくメモしている児童が何人もいた。また、友だちのよいところを評価する欄には、「聞き取りやすかった」などの発表者をほめるコメントが多く見られた。

この評価についての指導者からの意見

- ・相互評価シートを用いることで児童が頑張って取り組んでいた。
- ・お互いのよいところをほめあうことで、相手を認める気持ちが高まった。
- ・メモを取ることに集中して、発表者の方を見ることがおろそかになっていた。

（エ）考察

今年度の改善点に関しては、「メモを取ることに集中して、発表者の方を見ることがおろそかになっていた」など、聞く態度に課題があるという意見があった一方、「相互評価シートを用いることでがんばって取り組んでいた」などの肯定的な意見が多かった。このことから相互評価シートを用いることによって、しっかり発表を聞こうとする態度への動機づけができたと考える。また、継続的に取り組むことによって、しっかり聞こうとする態度の育成が図られるとともに他者理解を深めることができると考える。

（５）外国語活動における評価のまとめ

指導者による評価においては、評価規準・評価基準、方法、場面の具体例を提示し、児童の学習状況について、できたことを点数化したものや、ワークシートへの記述内容を数量的にとらえたものを評価シートに記録することで、客観性を持たせることができた。また、児童による評価においては自己評価、相互評価シートを用いることで、指導者による評価の補助資料を得ることができた。これらによって得られた客観的な記録は、総括的評価の根拠として活用できると考える。また、児童のがんばりをほめたり、支援を行ったりすることにつながる等、形成的評価にも生かすことができると考える。加えて、自己評価、相互評価シートの改善によって、児童に学習状況をより

	1点	3点	5点
声の大きさ	小さすぎた 大きすぎた	少し小さかった 少し大きかった	ちょうどよかった
目線 (相手を 見て)	ほとんど 見ていなかった	少し 見ていなかった	見ていた

ほかにこんないいところがあったよ!

書いた人の名前 ()

図 11 相互評価シート

具体的にふりかえらせたり、聞く活動に取り組む態度を高めたりすることができたと考える。

しかし、研究を進める中で最も困難であったのは、評価基準や場面を設定することであった。第5・6学年の学級担任が個々に設定するのではなく、学校全体で適切な評価基準や場面を考え設定することが必要だと感じた。そのためには、まず評価についての基本的な考え方である「評価観」を共有することが大切である。「評価観」の共有とは、具体的には他教科での評価の実践を取り入れたり、年間を通した評価計画を立てたりすることなどに学校全体で取り組むことである。そうすることで、だれが指導にあたっても児童に公平な評価を行うことができるようになる。また、その過程において評価の焦点化が行われ、3つの観点についてのバランスの良い評価が行われるようになり、より効率的な評価につながると考える。

3 小学校（外国語活動）と中学校（外国語科）との円滑な接続

下記の対照表（表2）に示すように小学校外国語活動と中学校外国語科の目標については共通する部分が多いが、学習内容等においては違いがある。

表2 小学校外国語活動と中学校外国語科の対照表

		小学校外国語活動	中学校外国語科
扱い		領域	教科
目標		外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う
評価の観点		「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」 「外国語への慣れ親しみ」 「言語や文化に関する気付き」	「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」 「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」 「言語や文化についての知識・理解」
内容	技能	「外国語を聞いたり、話したりすること」を主な活動内容に設定	「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能をバランスよく指導
	文字の取り扱い	アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめる	アルファベットの活字体を使用できるようにする
	語彙	地域の実情や児童の実態を踏まえて、複雑にならないように、(中略)指導において留意する	指導する1200語程度については、(中略)運用度の高いものを用い、活用することを通して定着を図るようにする
	文法指導	中学校段階の文法等を単に前倒しにするのではなく、あくまでも、体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、音声や表現に慣れ親しむ	コミュニケーションを支えるものにとらえ、コミュニケーションを実際に行う言語活動と効果的に関連付けて指導すること

目標及び内容については『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』『中学校学習指導要領解説 外国語編』より抜粋

『中学校学習指導要領解説 外国語編』（文部科学省 2008）には、「中学校の指導計画の作成に当たっては、小学校における外国語活動を通じて培われた一定の素地を踏まえながら、中学校における外国語教育への円滑な接続が実施できるように配慮する必要がある。」「地域の小学校における外国語活動の指導において、どの程度の素地が養われているのかを十分把握するとともに、扱われている単語や表現などについてもきめ細かく把握した上で、特に第1学年の指導計画の参考とすることが大切である。（※5）」と述べられている。小・中学校の円滑な接続のためには、互いの学校で行われている授業についてよく知り、それに基づいてそれぞれの授業や活動を考えて取り組む必要がある。

（1）現状と課題

2010年8月、第6学年次に外国語活動を経験した田辺市内の中学校1年生82名に対し、外国語活動と中学校での英語学習についての意識調査を行った。また、田辺市内の中学校外国語科担当教員27名に対し、外国語活動に係る小・中連携についての意識調査を行った。

その結果、課題として以下の4点が明らかになった。

ア 中学校外国語科に対する不安や負担の軽減

56%の生徒が「小学校外国語活動と中学校外国語科の間に違いがある」と回答した。具体的な違いとして「文字導入」「技能評価」「授業形態の違い」「文法指導」「語彙の増加」をあげており、生徒はこれらの違いに対して不安や負担を感じているのではないかと考えられる。そのため、それらを軽減する取組が必要であると考ええる。

イ コミュニケーションをより重視した授業

生徒たちは「英語を学ぶ理由」の記述回答で、「将来役に立つから」「英語を使ったコミュニケーションが必要だから」等を挙げた。このことから、生徒は将来、英語を使ったコミュニケーション能力がより求められる社会になると感じていることがわかる。小学校外国語活動を通じて培われたコミュニケーション能力の素地を、中学校外国語科で養うコミュニケーション能力の基礎へ引き継ぐために、中学校の授業にコミュニケーションをより重視した活動を多く取り入れていく必要がある。

ウ 小・中教員の連携

92%の教員が「小学校外国語活動と中学校外国語科の連携は必要だ」と回答している。しかし、「小学校外国語活動担当教員と集まる機会を持っている」(29%)「互いの授業を参観している」(19%)「小学校で授業をすることがある」(11%)「(小・中で)一貫したカリキュラムを作成している」(4%)と回答した教員の割合は少ない(図12)。このことから、小・中学校の教員は連携の必要性を感じながらも、実際には十分に交流できていないことがわかる。

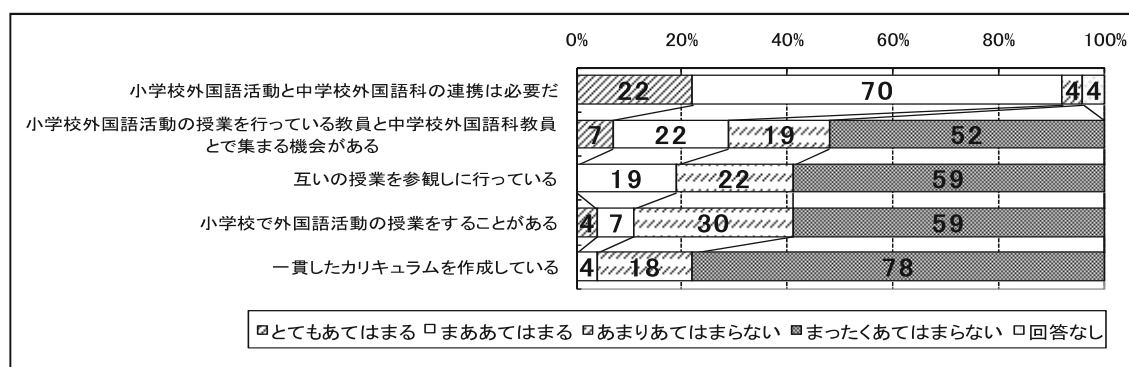


図12 小・中教員の交流の状況

エ 中学校での英語授業の工夫・改善

移行期間に外国語活動を体験した児童が今年度から中学校に入学しており、円滑な小・中接続のための早急な取組が必要である。アンケートでは81%の教員が「英語の授業展開や指導方法の工夫・改善が必要」と回答している(図13)。しかし、実際に「英語の授業展開や指導方法の工夫・改善をしている」と回答した教員は26%にとどまり、授業の工夫・改善の必要性を感じながらも実際には十分に組み立てていないことがわかる。

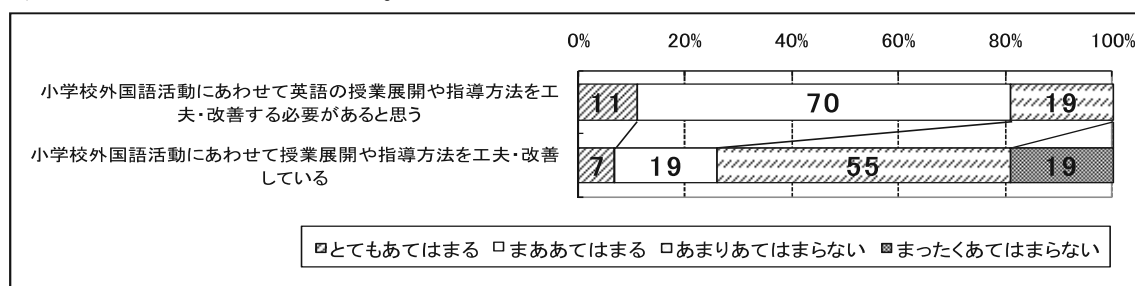


図13 中学校での英語授業の工夫・改善の状況

(2) 取組の基本的な考え方

以上のことから、円滑な小・中接続を目指し、以下のことに取り組むこととした。

前述のアンケートにおいて生徒たちが回答した小学校と中学校の間にある5つの違いのうち「文字導入」を取り上げ、それを軽減する取組として、発音とつづりの関係に気付くことを目的とした外国語活動用補助教材を作成することとした。外国語活動では音声を中心とした様々な活動が行われるが、文字については触れる程度の扱いで、音声によるコミュニケーションを補助するものとされている。しかし、文字がどのように発音されるかを知らなければ音声によるコミュニケーションの補助になることは難しいと考える。また、中学校に入学した段階で文字がどのように発音されるかを知っていれば、英語を読んだり書いたりする際に大きな手がかりとなると考え、外国語活動用補助教材作成に取り組むこととした。

もう1つの取組として、『英語ノート』を活用した中学校での授業展開例を示すこととした。その理由は以下の2点である。1点目は、チャンツ等の小学校で慣れ親しんだ活動を中学校に取り入れることで、中学校での授業への安心感を与え、学習に取り組みやすい雰囲気を作ることができると考えたからである。2点目は、外国語活動で経験してきたコミュニケーション活動を取り入れることで、外国語活動で養われた「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が、引き継がれ、高められることにつながる考えたからである。また、このことは、先のアンケートにあった英語を使ったコミュニケーションへのニーズに応えることにもなると考える。

そこで、本研究では円滑な小・中接続を目指した授業改善の一例として、以下の2点に取り組むこととした。

1. 外国語活動用補助教材「どんな音かな？クイズ」の作成
2. 小学校外国語活動での経験を生かした中学校での授業展開例の提示

(3) 外国語活動用補助教材「どんな音かな？クイズ」の作成

ア 教材の概要

中学校に入学した生徒が英語でまずつまづくのは、アルファベットの文字の名前と音のくい違いである。英語は日本語のように文字の名前と音が一致した言語ではないため、中学校で英語を読んだり書いたりする時に困難を生じやすい。例えば、アルファベットのCは[si:]（スィー）と読まれるが、他の文字と結び付き単語になると[k]（ク）と発音される。CAKEは[si: ei kei i:]（スィー エイ ケイ イー）ではなく[keik]（ケイク）と発音される。このことは生徒が英文を読んだり、つづりを覚えたりする時に困難を感じる原因となると考える。『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』では、発音と綴りの関係については、中学校段階で扱うものとされており、小学校段階で取り扱うことはしていない。しかし、外国語活動で文字の名前と音が違うということに触れておけば、中学校で英語を読んだり書いたりする時のつまづきを小さくできると考える。そこで、文字の名前と音が違うということに体験的に気付かせることをねらいに、外国語活動用補助教材として「どんな音かな？クイズ」を作成し、授業の導入時に5分程度で実施した。

このクイズは單元ごとにアルファベットを1つ取り上げる。次頁の図14に示したように、まずプレゼンテーションソフトのスライドを用いて文字を示し、その文字が表す音を聞かせ発音練習をさせる（シート1）。次に、5つの絵を示し、その絵を表す英語の音声を聞かせて発音練習をさせた後、1枚目で練習したアルファベットで始まる語を選ばせ（シート2）、最後に答え合わせを行う（シート3）。児童が楽しみながら取り組めるように、絵を用いたクイズ形式にし、また児童になじみの

ある物をクイズの選択肢として用いた。教材として取り上げたのは、子音字^(注2)ばかりの C, T, S, D, B, F, H, P の8つである。これは母音字^(注3)は発音の種類が多く、日本語にはない音も含まれるため指導が難しいと考えたからである。



図 14 文字の名前と音をつなぐ教材「どんな音かな？クイズ」

イ 結果

研究協力校での授業では、児童は再生される音声の後について聞こえた通りに発音し、文字の名前と音の違いに気付くことができていた。また、クイズについても積極的に手を挙げ、楽しんで取り組むことができた。クイズの答えを間違えた場合も、くり返し発音することで文字の名前と音の違いに気付く姿が見られた。

事後アンケートの自由記述欄に見られた児童の感想

- ・クイズが楽しかった。
- ・C の発音がうまくできた。

この教材を使った指導者からの意見

- ・クイズ形式は興味・関心をひくことに有効であり、児童はよく聞き取れていた。
- ・分かりやすかった。
- ・中学校での活動内容の前倒しではないか。
- ・発音が難しい。

ウ 考察

「どんな音かな？クイズ」を用いて、文字の名前と音の違いに気付かせることが、中学校での「読むこと」「書くこと」の活動に対する不安や負担を軽減する手立てとなると考える。指導者から「中学校での活動内容の前倒しではないか」という意見を得たが、中学校のように発音の定着を求めて行うものではなく、体験的に違いに気付かせることを目的に行っているのだから、前倒しではないと考える。また「発音が難しい」という意見については、取り上げた文字のうち、特に無声音^(注4)は聞き取ったり発音したりすることが難しいからだと考え。教材とともに提供する学習指導案に、どのような特徴を持った音か、どのように発音すればよいかについてわかりやすく示しておく必要があると考える。また、小学校の指導者にとってもこのような教材を使った指導を通して英語の音に触れることが、自身の英語力を向上させることにつながると考える。

今回の授業は、昨年度の研究成果である ALT 動画を含む ICT 補助教材のパッケージに、今年度作成した「どんな音かな？クイズ」を組み込んで実施した。児童は ICT 補助教材を使った授業に意欲的に取り組むことができていた。指導者及び授業参観者からは「音声・映像・動画がワンタッチで出てくるので大変便利だ」、「一回の授業で使用する教材が1つのファイルに入っていることで使いやすい」などの肯

(注2) 26 文字のアルファベットのうち、a・e・i・o・u 以外の 21 文字

(注3) 26 文字のアルファベットのうち、a・e・i・o・u の 5 文字

(注4) [p][t][k][f][s]などの声帯を震わせずに息だけで発音する音

定的な意見を得た。一方「全てのコンテンツを使わなければならないのか」との意見もあった。これについては、指導者が自分の指導経験や学校・児童の実態に応じて、必要なコンテンツを選択して使用していくことが望ましいと考える。

また、授業の中では機器の操作に時間がかかったりトラブルが生じたりして流れが止まってしまうことがあった。しかし、この問題は今後機器が普及するに従い、徐々に指導者が ICT 機器の使い方に慣れていくことで改善されると考える。

(4) 小学校外国語活動での経験を生かした中学校での授業展開例の提示

本研究においては、外国語活動との接続を目指した中学校での授業展開を考えた。

表 3 に本研究で取り組んだ学習活動の一覧を示す。

表 3 外国語活動との接続を目指した学習活動一覧

時	Unit8 新出の文法事項	外国語活動との接続を目指した学習活動
1	Where is ~? It is on the desk. 場所を尋ねて in /on /under /by を使って答える	・チャンツ (●) ・ Where do you want to go? を使って友達と会話をする (△・■・◎) ・ Where is ~? を使って対話をする (■・◎)
2	Whose ~ is this? It is mine. 誰のものか尋ねて「~のもの」と 答える	・ Whose ~ is this? を使ったクイズを作り、グループでクイズ大会をする (■・◎)
3	Do you know her? 人称代名詞目的格	
4		・ 自分の会いたい有名人についてスピーチを作成し発表する (■・◎)

(●)は外国語活動で慣れ親しんだ活動を取り入れた学習活動、(△)は外国語活動と共通した言語の使用場面を取り入れた学習活動、(■)は自己表現活動、(◎)はペア・グループ等の学習形態を用いた活動を表す。

ア チャンツ

チャンツとは一定のリズムに乗せて英単語や英文を発音させる活動である。『小学校外国語活動研修ガイドブック』(※6)には以下の利点が示されている。

- ・心理的な抵抗を下げ学習への興味・関心を持たせることへの効果
- ・外国語独特のリズムやイントネーションをくり返し練習する機会の確保
- ・表現に慣れるためのドリル活動として利用し、スムーズに次の活動に移行
- ・記憶や集中力を助ける働き

『外国語活動年間指導計画』(『英語ノート1, 2 指導資料』)では、第5・6学年あわせて70時間の授業のうち45時間の授業でチャンツが設定されていることから、児童にとってなじみのある活動だということがわかる。研究協力校で実施した外国語活動の授業においても、児童はリズムに乗って元気に発音練習を繰り返していた。また、班対抗にするなど形態に変化を持たせると、さらに意欲的に取り組むことができていた。そこで、中学校でも外国語活動とつながりを持たせるための方策の1つとしてチャンツを取り入れることにした。

(ア) 内容

活動に必要な単語について、チャンツ用リズム CD (※7) を使用して発音練習を行った。

(イ) 結果

最初は戸惑っている生徒もいたが、慣れてくると楽しそうにリズムに乗りながら単語を発音することができていた。事後アンケートでは、全ての生徒が「チャンツに進んで取り組むことができた」と回答し、その理由として「リズムに乗れて英語が言いやすかった」「ときどき声が小さくなってしまったけど発音はできた」と記述していた。

(ウ) 考察

生徒になじみのある活動で無理なく取り入れることができ、教室の雰囲気が和んだ。生徒は積極的にリズムに乗って発音練習をすることができ、スムーズに次の活動に移行することができた。しかし、生徒の中には音楽やリズムに乗って活動する形態に抵抗を覚えるものもいると考える。チャンツを取り入れる時期や取り入れ方については生徒の状況を考慮する必要があると考える。

イ 共通の言語の使用場面

小泉(2011)は、小・中学校のシラバスデザインの相違点について以下のように述べている。「中学校英語の検定教科書は、そのほとんどが文法項目の指導を中心に構成されている。(中略)学習指導要領が求める『言語の使用場面』『言語のはたらき』を意識した教材は、本課から独立させた扱いになっていることが多い。一方、小学校外国語活動では、場面を設定しての指導がほとんどである。自己紹介の場面、買物の場面、道案内の場面、将来の夢を語りあう場面など、設定した場面に応じて表現を指導する。(※8)」本研究においても、外国語活動では場面を大切にして活動を行っていることを重視し、中学校と小学校の言語使用の場面をつなぎ、生徒に外国語活動で慣れ親しんだ表現などに再度触れさせることで、中学校の授業をなじみやすいものにしようと考えた。

(ア) 内容

今回授業を行った『New Horizon 1』Unit 8「はじめてのカナダ旅行」は旅行をテーマにした単元となっており、『英語ノート2』の Lesson 6「行ってみたい国を紹介しよう」の言語の使用場面とつながりがあると考えた。そこで、導入時に両者を関連付けた活動を行った。具体的には『英語ノート2』の Let's Listen ②の音声を使用し、指導者が登場人物に“Where do you want to go?”と尋ねるインタビューを設定し、生徒にその内容を考えながら聞かせた。その後、必要な語彙や表現の発音練習を行い、同様のインタビュー活動をペアで行わせ、何組かに発表させた。

(イ) 結果

“Where do you want to go?”の表現を文字で提示していなかったが、生徒たちは数回の口頭練習の後、ペアでスムーズにインタビュー活動を行えた。また、言いたいことを伝えるのに必要な表現について指導者に質問し、しっかり言うことができていた。さらに授業後には、「外国語活動を思い出した」等の感想が聞かれた。

(ウ) 考察

今回授業を実施した中学校の生徒たちは3つの小学校から入学しており、17名中15名が『英語ノート2』を使用した授業を経験していた。今回のインタビュー活動に使用した表現“Where do you want to go?”に使われている文法事項(to+動詞の原形)は、中学2年生で学習する内容である。そのため、今回のような数回の口頭練習を行っただけでペアでインタビューしあう活動は、生徒たちにとって難易度が高いと予想していた。しかし、上で述べたように生徒たちはインタビュー活動に意欲的に取り組むだけでなく、スムーズに英語でやり取りをすることができていた。これは、外国語活動で英語の表現をひとつのかたまりとして聞き取り、聞こえた通りに発話するといった体験を積んできていたからだと考えられる。以上のことから、共通の言語の使用場面を取り入れた活動を行うことで、生徒は小学校での経験を生かし、中学校での学習に取り組みやすくなると考える。

ウ 自己表現活動

『小学校外国語活動研修ガイドブック』(文部科学省)では、小・中接続としてのコミュニケーション活動や自己表現活動について「小学校外国語活動では、コミュ

ニケーションに対する積極的な態度や言語や文化についての体験的な理解等を目標に指導される。中学校段階ではこれらの態度や理解をより一層伸ばすために、頻繁にコミュニケーション活動や自己表現活動に取り組ませることが必要になってくる。(※9)」とされている。『英語ノート』では1つの単元は原則4時間で行うことになっており、第4時には第1～3時に扱った表現を用いたスピーチなどの自己表現活動が設定されている。中学校の英語の授業でもインタビュー活動やスピーチを行っているが、小学校のように場面やテーマが設定された自己表現活動というよりも、新出の文法事項を定着させるためという要素が強いのではないかと考える。よって、本研究では文法事項の定着にとらわれずコミュニケーションを重視した自己表現活動を授業に取り入れることにした。

(ア) 内容

クイズ大会

生徒に前もって他の先生からクイズに使う物を借りておくように指示する。まず、“Whose～?”を使ってその持ち物がどの先生のものであるか尋ねる英文と、既習の英語を使ってヒントになる英文をワークシート(図15)に書かせ、グループでクイズ大会を行った。

自分の会いたい人やキャラクターを紹介するスピーチ

『New Horizon 1』Unit 8 part 3には登場人物が空港で有名人を見かけ、その人について会話する場面がある。それと同様に、ワークシートにそれぞれの生徒が会いたい有名人について作文し、グループ内でスピーチを行った(図16)。スピーチをするときの注意点として「ちょうどよい声の大きさ」「前を向いて原稿を見ずに発表」「アイコンタクト」「英語らしい発音」の4点を提示し、練習するときもこの点に気をつけるように指示した。また、この4点については、外国語活動と同様に相互評価シートを使った評価の視点としても用いた(図17)。

クイズを作ろう!

Name()

どの先生の持ち物かあててクイズを作ろう!

クイズの作り方

ヒント(持ち主の先生の特徴を英語にする)を作る

例) 住んでいるところ、好きな物、背が高い、髪の毛が長い、年齢、教えている教科など

教科名は122ページ

He/She likes ~.

He/She teaches ~.

He/She plays ~.

He/She lives in ~.

He/She is ~.

わかりにくいヒントから出してあげよう。

クイズを出すときの注意

このプリントを盗まざるべく覚えて、相手の目を見ながらクイズを出そう

クイズ _____

ヒント(持ち主の先生の特徴を英語にする)

1 _____

2 _____

図15 ワークシート
「クイズを作ろう!」

Speechをしよう!

Name()

自分が会いたい有名人について、その人(キャラクター)を紹介するスピーチをしよう!

<スピーチの順序>

- あいさつ
- 知っているかたずねる
- こちらは～ですと紹介する
- その人(キャラ)の説明をする(2文以上書くこと)
- お礼を言って終わる

スピーチの例

Hello.
Do you know him?
This is Ichiro.
He is a baseball player.
I like him very much.
Thank you.

できるだけ前を見て、原稿を見ないで言うよう! 適切な速さで、適切な音量で話そう!!

※班で発表し合うときは、友達の発表内容をメモしてね!

Speech _____

図16 ワークシート
「Speechをしよう!」

Name()

さん・くん の発表を聞いてわかったことをメモしよう。

・

・

・

スピーチをチェックしよう。

A ばっちり B まあオッケー C がんばろう!

①ちょうど良い声の大きさだった	A	B	C
②前を向いて原稿を見ずに発表できていた	A	B	C
③アイコンタクトをきちんとしていた	A	B	C
④英語らしい発音だった	A	B	C

よかったところを言う。

図17 相互評価シート

(イ) 結果

生徒の様子

「クイズ大会」では、生徒はクイズやヒントの英文を楽しんで考えることができていたが、英文を書くことに困難を感じている生徒もいた。

「自分の会いたい人やキャラクターを紹介するスピーチ」では、生徒はその人について思っていることや伝えたいことを積極的に表現できていた。また、友達の発表についても集中して聞くことができていた。

事後アンケート

94%の生徒が「自分の会いたい人（キャラクター）についてのスピーチに進んで取り組むことができた」と回答した。その理由として「その人に会いたいと思って積極的に取り組めたから」「知らない単語がわかったし、自信を持つことができた」「発音やアイコンタクトを心がけてできたから」「自分の思ったことをスピーチできたから」と記述されていた。

(ウ) 考察

テーマ設定について

生徒は、前述の2つの自己表現活動に意欲的に取り組むことができていた。また事後アンケートからは、生徒たちが自分自身の言いたいことを英語で伝え合うことが楽しいと感じていることが読み取れた。これは、兼重・直山(2008)が外国語活動の学習内容の選択と配列を行う際の留意点として「児童が進んでコミュニケーションを図りたいと思うような、興味・関心のある題材であること(※10)」を挙げているように、テーマが身近なものであったことが、生徒の伝えたいという気持ちを高めることにつながったと考える。このことから、中学校においても身近なテーマを設定した自己表現活動を取り入れることで、外国語活動で養われた積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を高めていくことができると考える。

「書くこと」について

平成20年度和歌山県学力診断テスト(1年)において、トピックについてのまとまりのある英文を書かせる問題の正答率が51%(※11)と低かったことから、「書くこと」が本県の英語教育が抱える大きな課題であることがわかる。これは書く活動が十分に授業の中に取り入れられておらず、まとまりのある英文を書くという学習経験が不足しているためであると考えられる。本研究で取り入れた自己表現活動では、伝えたい内容をまずワークシートに書かせてから発表させたので、このような活動を取り入れていくことは、生徒が「書く」場面を増やすという点においても有効であると考えられる。

全体を通して

今回授業を行う中で、毎回の授業に自己表現活動を取り入れることは難しかった。これは中学校の学習内容を定着させるために十分な時間を取る必要があるためであった。このことから、1単元に1回程度コミュニケーションの場面を設定する等、生徒の学習状況にあわせて自己表現活動を計画的に位置付けることが必要であると考えられる。

エ ペア・グループ活動

外国語活動では、ペア活動やグループ活動を数多く取り入れている。それは、1つの表現の練習に変化を持たせ飽きさせずに活動させること、また学級内で豊かな人間関係を構築し、児童同士の他者理解を促し自尊感情を高めることをねらいとしている。今回の中学校の授業においてもそのねらいを引き継ぎ、パターンプラクティスや対話練習などのように機械的にやりとりをするのではなく、伝えたいという気持ちを大切に活動の形態の1つとしてこれらの活動を積極的に取り入れることにした。

(ア) 内容

ペア活動

- ・“Where do you want to go?” を使ってお互いに行きたい場所を尋ねあう会話練習
- ・互いの部屋について尋ねあう活動

グループ活動

- ・グループでクイズ大会をする活動
- ・自分の会いたい人やキャラクターを紹介するスピーチ

〈詳細は本稿 pp. 17-19 イ 共通の言語の使用場面, ウ 自己表現活動を参照〉

(イ) 結果

生徒の様子

ペア活動では、相手にわかりやすいように英語を言ったり、わからないところを教え合ったりしながらやり取りをしていた。

グループ活動では、協力してクイズやスピーチを進行し、発表するときも友達にわかるように英語を言うことができていた。

事後アンケート

94%の生徒は「ペアで進んで英語を使ってやり取りすることができた」と答えており、その理由として「相手のことを考えながら言わなければいけないと思ったから」「わからないところを教えたり教えられたりしたから」を挙げている。また、全ての生徒が「グループでの英語のクイズに進んで取り組むことができた」と回答しており、理由として「グループの人に分かりやすく英語を言ったからです」「グループで協力ができたからです」等と記述していた。

(ウ) 考察

事後アンケートの記述からは、実際にパートナーやグループのメンバーと英語でやり取りすることでコミュニケーションの楽しさを感じ、意欲的に取り組んでいたことが読み取れた。また、回数を重ねるにつれて活動形態に慣れ、リラックスした雰囲気でお互いに自分の言いたいことを相手に伝えられるようになっていたことから、コミュニケーションへの意欲をより高めるために、継続して取り組むことが重要である。

(5) 小・中接続のまとめ

研究協力校での授業を振り返って

本研究においては、富田小学校、栗栖川小学校、二川小学校、中辺路中学校の協力を得て授業を実施した。

小学校では、児童が耳で聞いた音をくり返すだけで、ジェスチャーを交えながら表情豊かに活動を行っていたことから、体験的理解やコミュニケーションを重視した活動によって児童にコミュニケーション能力の素地の育成が図られていることが分かった。また、中学校においては、外国語活動を踏まえ、さらにコミュニケーション能力の基礎を養うために今まで行ってきた指導に少し工夫を加えることで、授業改善に取り組むことができると分かった。

これらの授業で得られた成果を基に、以下に授業改善の基本的な考え方について述べる。

授業改善に取り組む前に

中学校の授業改善を図るためには、中学校教員が外国語活動の目標、内容、教材、指導方法等を理解することが大切である。さらに、目の前の生徒が小学校で身に付けてきているコミュニケーションへの積極的な態度、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる経験などのコミュニケーション能力の素地がどの程度養われているかを把握したうえで、指導方法や内容等を検討することが必要だと考える。

授業改善の考え方

授業改善の考え方として以下の3点を挙げる。

1点目は、本研究で授業にチャンツを取り入れたように、生徒が慣れ親しんできた『英語ノート』を活用し、なじみのある活動を授業に取り入れてみることである。その際小学校と同じことをするのではなく、生徒の知的好奇心に合うように、中学校での学習内容を加味して活動を設定することで、中学校での授業を充実させることにつながると考える。

2点目として、生徒が外国語活動で身に付けてきたコミュニケーション能力の素地をさらに伸ばしていくために、本研究で提示したスピーチなどの自己表現活動を取り入れ、コミュニケーションをより重視した授業展開を考えることである。

3点目として、本研究では時期的に実施することができなかったが、中学校入学当初に英語学習についてのガイダンスを行うことである。ガイダンスとは、中学校で何が変わるのか、小学校と同じように大切にしなければならないことは何かなどについて生徒に分かりやすく伝えることである。そうすることで生徒たちは見通しを持って中学校での授業に取り組むことができると考える。

小学校での体験や学びを生かすためには、中学校での指導が変わらなければならない。大がかりな授業改善を必要としているのではない。普段の授業に少し外国語活動の要素を取り入れるだけでも変化が表れるはずである。大切なのは小さな一歩を踏み出し、取り組んでみることである。この研究で提示した授業展開例等のような授業改善の取組を、今後進めていくことが重要であると考ええる。

4 今後に向けて

外国語活動は間もなく全面実施となる。移行期間として平成21,22年度には全面実施に向けた様々な取組がなされ、一定の基盤が整ってきたと言える。それに伴い、実際に授業を行う教員からは、より具体的な課題が指摘されるようになった。今年度研究内容として取り組んだ評価もその一つである。コミュニケーション能力の素地を育成するために、3つの観点をどう評価すればよいのかについて、この研究では指導者による評価と児童による評価を柱として、評価規準・評価基準、方法、場面の例を示したが、よりよい評価の在り方についての結論は今後の研究に余地を残すことになった。

同じく外国語活動の全面実施を目前にして、早急に対応を求められているのが円滑な小・中接続である。小学校、中学校、高等学校の外国語教育の目標には共通する部分が多い。外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地」は中学校の目標である「コミュニケーション能力の基礎」に、そして高等学校での「コミュニケーション能力」へとつながっていかなければならない。そして、『英語ノート』という共通教材があり、領域として位置づけられる外国語活動の学習内容を、教科である中学校外国語科に円滑に接続するためには、中学校側からのアプローチが不可欠である。それゆえ、今年度の研究では、現行の中学校用教科書をもとにして、中学校1年生での小・中接続を目指した授業展開例とその基本的な考え方を提示した。

平成24年度に全面実施される中学校の新学習指導要領では、言語活動の充実を通じて言語材料の定着を図るとともに、コミュニケーション能力の一層の育成を目指し、外国語科の単位数が3から4に増加し、加えて、指導する語数も900語程度から1200語程度に増えた。また、それを踏まえて新しく発行される教科書には、入門期に外国語活動との接続を目的とした内容が組み込まれることが予想される。小学校外国語活動と中学校外国語科を円滑に接続しようとする取組は、中学校の授業をコミュニケーション能力の一層の育成を目指したものに改善していこうとする流れにつながっていく。学習指導要領の改訂を踏まえ中学校の授業が目指す方向を見据えたうえで、円滑な小・中接続の取組を進めていくことが重要であると考ええる。

謝辞

本研究を行うにあたり、京都外国語大学 特任教授 齋藤榮二氏、京都外国語大学 教授 石川保茂氏、帝塚山学院大学 専任講師 近藤睦美氏には、研究の方向性や関連する研究等について多数のご助言やご示唆をいただきました。授業実施にあたっては、田辺市及び白浜町教育委員会並びに田辺市立中辺路中学校、栗栖川小学校、二川小学校、白浜町立富田小学校の皆様にご多大なご協力とご理解をいただきました。また、ICT 補助教材の作成においては、田辺市外国語指導助手 Ms. Cynthia Alice White にご協力いただきました。ここに記して、深く感謝いたします。

〈引用文献〉

- ※ 1 文部科学省 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』（2008）
- ※ 2 文部科学省『児童生徒の学習評価の在り方について報告』（2010）
- ※ 3 金森 強著『小学校「外国語活動」の評価のあり方を考える』（2010）
- ※ 4 樋口 忠彦著「小学校「外国語（英語）活動」の推進体制の確立」『月刊教職研修 1 月特大号』教育開発研究所 pp.38-39（2009）
- ※ 5 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』 p.68（2008）
- ※ 6 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』旺文社 p.57（2009）
- ※ 7 岡 秀夫・金森 強編著『小学校英語教育の進め方 改訂版 ―「ことばの教育」として―』成美堂（2009）
- ※ 8 小泉 仁著「小学校で英語を学習することで何が変わるか」『英語教育 1 月号』大修館書店 p.32（2011）
- ※ 9 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』旺文社 p.40（2009）
- ※ 10 兼重 昇・直山 木綿子編著『小学校 新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書出版 p.68（2008）
- ※ 11 和歌山県教育委員会『平成 20 年度和歌山県学力診断テスト実施報告書』

〈参考文献〉

- ・松川 禮子・大下 邦幸編著『小学校英語と中学校英語を結ぶ―英語教育における小・中連携』高陵社書店（2007）
- ・松川 禮子・大城 賢共編著『現場の先生をサポートする小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社（2008）
- ・岡 秀夫・金森 強編著『小学校英語教育の進め方 改訂版 ―「ことばの教育」として―』成美堂（2009）
- ・安彦 忠彦監修 大城 賢・直山 木綿子編著『小学校学習指導要領の解説と展開』教育出版（2008）
- ・兼重 昇・直山 木綿子編著『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書出版（2008）
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』（2008）
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』（2008）
- ・文部科学省『中学校学習指導要領』（2008）
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』（2008）
- ・文部科学省『英語ノート 1，2』（2009）
- ・文部科学省『英語ノート 指導資料 1，2』（2009）
- ・文部科学省『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要領の改善等について』（2010）
- ・辰野 千嘉著『三訂版 学習評価基本ハンドブック 指導と評価の一体化を目指して』図書文化社（2010）
- ・菅 正隆編著 大牟田市立明治小学校著『外国語活動評価づくり完全ガイドブック』明治図書（2010）